本学の柔道整復教育における臨床実習が学生に与える効果の検討
―臨床実習後アンケート調査報告―

○大野均[1)]，甲斐範光[1)]，郡佳子[1)]，畑山元政[1)]，橋本泰央[1)]，
上村知弘[1)]，石川貴之[1)]，土居誠[1)]，川崎一朗[2)]

A Study of the Effectiveness of a Clinical Training in Judotherapy Education

1）帝京短期大学　　2）帝京平成大学

要旨

本学柔道整復コースでは厚生労働省の指定する臨床実習をより充実させたものにするための学生指導の強化を行っている。その本学臨床実習が学生に与える効果を明らかにするため、臨床実習を修了した学生87名にアンケート調査を行った。その結果、臨床実習を体験したことで柔道整復師の仕事のイメージが明確になったと回答した学生が多くみられた。また臨床実習の効果としては医療機器の使い方を学べたことを挙げた学生が多く、柔道整復師としての心構えを挙げた学生も多かった。臨床実習後に学生の柔道整復師の資格取得への意志や勉強への取り組み意欲は有意に上昇したが、実質的に意味のある上昇とは言えなかった。臨床実習の時間を学生にとって有意義なものにするために今後も検討が必要である。

Ⅰ　はじめに

柔道整復師の養成施設で学ぶ学生には臨床実習が義務付けられている。

臨床実習の目的は、学生が講義や実技実習で習得した知識や技術が実際の現場で患者の治療にどのように活かされているかを見学し、その必要性と重要性を認識することである。臨床実習において学生は患者の誘導および使用する医療機器の準備、治療の補助を行う。また指導者の診断手順や治療を見学し、指導者と症例検討を行う。臨床の場に学生を早期にさらすことで医療従事者としての適切な行動、態度、モラル、そして責任感を修得することも臨床実習の重要な目的である。

本コースでは臨床実習を付属の接骨院にて２年次に実施している。５月から11月にかけて２名から３名ずつのグループごとに、付属の接骨院の診療時間内に実習を行っている。学生は通常の講義時間外に、約一週間連続で臨床実習を行う。実習に参加する前に実習要項に沿った事前説明会を実施し、基本的な医療器の取り扱いや院内でのマナー、接遇態度などを再度復習し、通院する患者に迷惑のかからないよう配慮を行っている。

臨床実習は講義で学んだ知識技術を実践につなげる役割を持った重要な教育科目である。臨床実習において学生は講義で学んだ知識が実際の診療の場でどのように活用されているのかを間近で観察することとなる。また患者と接する機会を持つことで患者とのコミュニケーションの重要性や気遣いの大切さなど、講義では直接学ぶことのできない実感を得ることができる。これらの体験や実感を得る機会は通常講義では少なく、その意味で臨床実習における体験は学生にとっては非常に希少で価値のあるものである。そのため臨床実習を学生にとってより意義のあるものにするための努力が我々には求められている。

臨床実習をより意義のあるものにするためには、まずは現状の分析がなされなければならない。そこで本研究では今後の研究の第一歩として臨床実習を修了した学生にアンケート調査を行い、臨床実習で学生が感じたこと、および臨床実習で得た効果の検証を行った。

Ⅱ　目的

臨床実習の経験を学生がどのように捉えているかを把握し、臨床実習が学生に与える効果を検討することを目的とした。

Ⅲ　対象

2013 年度の臨床実習に参加した、本学の柔道整復コースに所属する３年生を対象とした。調査は第一著者の授業時間の一部を使って実施した。在籍する 93 名のうち当日出席していた 87 名（昼間部 46 名、夜間部 41 名）から回答を得た。昼間部 46 名中男子は 26 名、女子は 20 名、夜間部 41 名中男子は 37 名、女子は４名であった。

Ⅳ　方法

独自に作成した無記名自記式の質問紙を使用した。学生にはアンケートへの回答の有無や回答内容の如何による一切の不利益が生じないことを書面にて説明した。

１　質問項目

質問項目は大きく基礎項目と臨床実習に関する項目の２項目から構成された。

基礎項目としては性別、昼間部夜間部の区別、接骨院またはその他の医療機関でのアルバイト経験の有無、医療資格の有無、接骨院への受診経験の有無、柔道整復専攻を選んだ理由、自身の勉強への取り組み態度を尋ねた。柔道整復専攻を選んだ理由のみは複数回答を可とした。

臨床実習に関する項目としては臨床実習前と臨床実習後の「柔道整復師の資格取得への意志」と「勉強への取り組み意欲」それぞれの強さについて、１から 10 までの十段階にてそれぞれ評価させた。変化があった場合は、変化が起きた理由を自由記述にて記入させた。次いで柔道整復師の仕事に対するイメージが臨床実習前と臨床実習後で変わったのかどうかを尋ね、変化があった場合は臨床実習前に抱いていたイメージと臨床実習後に抱いたイメージをそれぞれ自由記述にて回答させた。また臨床実習がどのような面で効果があったかを選択させ、最後に臨床実習に対する要望を自由記述にて記述させた。

２　統計処理

基礎項目については項目ごとの集計を行った。

臨床実習に関する項目については「柔道整復師の資格取得への意志」と「勉強への取り組み意欲の強さ」について臨床実習前と臨床実習後の差を見るために対応のある t 検定を行った。臨床実習の効果については選択項目の集計を行った。また自由記述させた内容については本コースの教員２名にて KJ 法による分類を試みた。

統計処理には SPSS・Statistic・21 を使用した。

Ⅴ　結果

１　基礎項目

基礎項目についての結果を図１に示した。

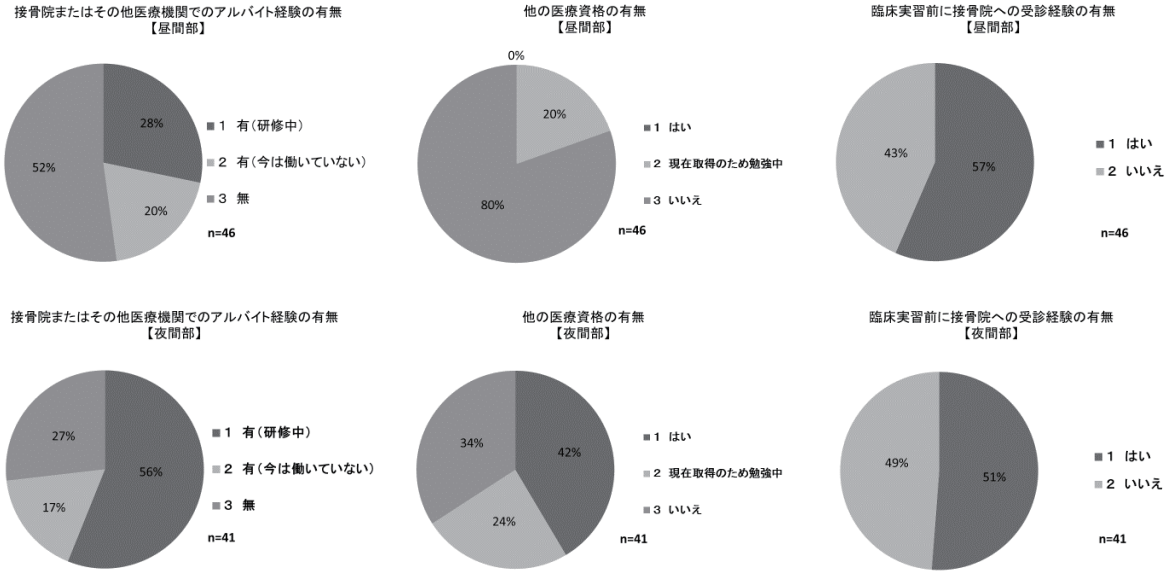
接骨院またはその他医療機関でのアルバイト経験の有無は、昼間部では 46 名中「有（研修中）」が 13 名（27.7％）、「有（今は働いていない）」が９名（19.1％）、「なし」が 24 名（51.1％）であった。夜間部では「有（研修中）」が 23 名（56.1％）、「有（今は働いていない）」が７名（17.1％）、「なし」が 11 名（26.8％）であった。

他の医療資格の有無は、昼間部では 46 名中「はい」が０名（０％）、「現在取得のため勉強中」が９名（19.1％）、「いいえ」が 37 名（78.7％）であった。夜間部では 41 名中「はい」が 17 名（41.5％）、「現在取得のため勉強中」が 10 名（24.4％）、「いいえ」が 14 名（34.1％）であった。

接骨院への受診経験の有無は、昼間部では 46 名中「はい」が 26 名（56.5％）、「いいえ」が 20 名（43.5％）であった。夜間部では 41 名中「はい」が 21 名（51.2％）、「いいえ」が 20 名（48.8％）であった。

柔道整復専攻を選んだ理由は、昼間部では「自分で考えて」が最も多く 22 名であった。「将来の就職を考えて」選んだ学生が次いで多く 19 名、「親や家族に勧められて」「接骨院の先生に憧れて」選んだ者がそれぞれ 16 名であった。夜間部では「将来の就職を考えて」選んだ学生が最も多く 20 名であった。次いで「自分で考えて」選んだ学生が 16 名、「接骨院の先生に憧れて」選んだ学生が９名であった。

自身の学業への取り組みの程度は、昼間部では「何点であれ国家試験に合格する程度の勉強でよい」と考えている学生が 18 名で最も多かった。「なるべく良い成績で国家試験に合格したい」と考えている学生が 11 名おり、「進級・卒業できるか不安だ」と答えた学生が 10 名であった。「国家試験はどうであれ、卒業さえできればよい」と答えた学生は５名であった。夜間部でも「何点であれ国家試験に合格する程度の勉強でよい」と考えている学生が 21 名で最も多かった。「なるべく良い成績で国家試験に合格したい」と考えている学生が 15 名おり、「進級・卒業できるか不安だ」と答えた学生は３名であった。「国家試験はどうであれ、卒業さえできればよい」と答えた学生は１名であった。



2　臨床実習に関する項目

（1）臨床実習前後における柔道整復師の資格取得への意志

昼間部では臨床実習前は平均 6.27（*SD* = 1.96）、臨床実習後は平均 6.89（*SD*=1.93）であり、1％水準で有意差がみられた（t（44）=3.05, p<.01）。

夜間部では臨床実習前は平均 7.73（*SD* = 2.25）、臨床実習後は平均 8.17（*SD*=1.76）であり、5％水準で有意差がみられた（t（40）=2.14, p<.05）。

変化が見られた理由を表 1 に示した。

表 1　資格取得への意志に変化があった理由
―変化があった学生の記述回答から―

臨床実習後に意志が上昇した理由	昼	夜
仕事のイメージが明確化したから	2	5
知識が必要だと思ったから	2	1
患者さんと接して充実感を感じたから	3	4
指導した先生への憧れ	1	2
臨床実習後に意志が低下した理由	**昼**	**夜**
自分が柔道整復師として働けるか不安になったから	2	1

＊　臨床実習に直接関連のない回答は除外した

（2）臨床実習前後における勉強への取り組み意欲

昼間部では臨床実習前は平均 5.87（*SD* = 1.93）、臨床実習後は平均 6.67（*SD*=2.12）であり、1％水準で有意差がみられた（t（44）=3.32, p<.01）。

夜間部では臨床実習前は平均 6.73（*SD* = 2.25）、臨床実習後は平均 7.45（*SD*=1.89）であり、5％水準で有意差がみられた（t（39）=2.42, p<.05）。

変化が見られた理由を表 2 に示した。

表 2　勉強への取り組み意欲に変化があった理由
―変化があった学生の記述回答から―

臨床実習後に意欲が増した理由	昼	夜
仕事のイメージが明確になったから	3	0
職場で求められる知識の必要性を感じたから	0	5
今の勉強ではだめだと感じたから	12	2

＊　臨床実習に直接関連のない回答は除外した

（3）臨床実習前後における柔道整復師の仕事に対するイメージの変化

臨床実習の前後で柔道整復師の仕事に対するイメージの変化はないと答えた学生は昼間部では 28 名（60.9%）、夜間部では 33 名（80.5%）であった。変化があったと答えた学生は昼間部では 16 名（34.8%）、夜間部では 7 名（17.1%）であった。昼間部 2 名、夜間部 1 名は回答がなかった。

臨床実習の前後で抱いていた柔道整復師の仕事に対するイメージを表 3 に示した。

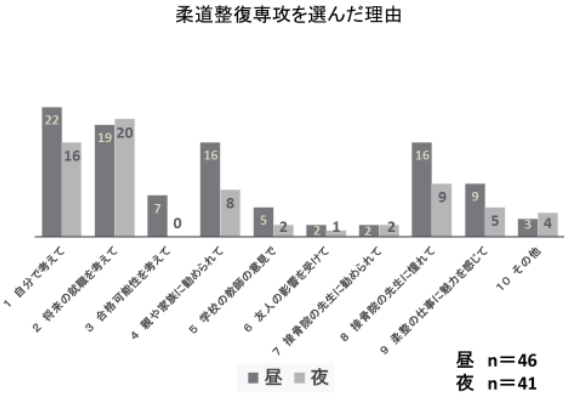
表 3　臨床実習前後における柔道整復師の仕事に対するイメージ
―イメージの変化があった学生の回答から―

臨床実習前	昼	夜
柔道整復師の仕事を知らなかった	3	3
高齢者の来院が多く、骨折等怪我は少ない、マッサージが多い	2	2
骨折・脱臼・捻挫を治す	1	3
患者さんとコミュニケーションを取らない	1	1
臨床実習後	**昼**	**夜**
具体的に仕事内容が理解できた	3	4
コミュニケーションを大切にする	2	5
難しいと感じた	1	1
患者さんのニーズにあった治療	2	0
慢性または亜急性が多い	0	2

＊　臨床実習前後の人数が合わないのは、一人が複数の回答をしている場合があるため
＊　質問に対する回答から外れていると考えられた内容はその他にまとめている

（4）臨床実習の効果

臨床実習がどのような面で効果があったかについての学生の回答を図 2 に示した。



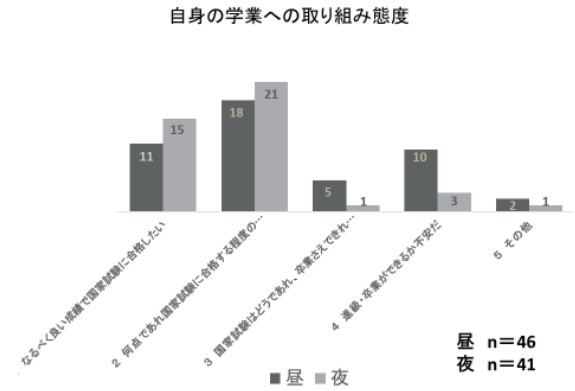


図１　基礎項目の回答

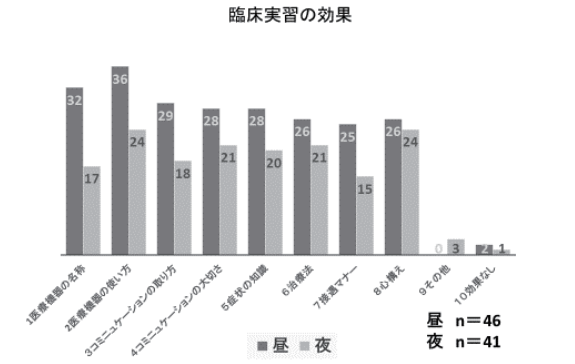


図２　臨床実習がどのような面で効果があったか

昼間部では「医療機器の使い方」と答えた学生が36名で最も多かった。夜間部では「医療機器の使い方」と並んで「心構え」と答えた学生が24名で最も多かった。

（５）臨床実習に対する要望

学生の要望で多かった要望は「見学だけでなく仕事もしたい」（昼間部５名、夜間部23名）、「治療の方法をもっと見たい」（昼間部３名、夜間部12名）、「包帯や検査法の練習時間が欲しい」（昼間部２名、夜間部１名）、「実習期間や回数及び人数の改善」（昼間部５名）であった。

Ⅵ　考察

１　臨床実習前後における柔道整復師の資格取得への意志

臨床実習を体験することで資格取得への意志が高まったと回答した学生の理由は大きく次の３つに分類できると考えられた。

１つ目の理由は臨床実習を担当した先生への憧れを抱いたことである。「接骨院の先生に憧れて」柔道整復専攻を選んだ学生が多かったように、臨床実習においても「先生への憧れ」は学生の資格取得への意志を高める要因の一つであると考えられた。

２つ目の理由は患者と接することで医療従事者としての充実感を感じたことである。資格取得への意志が高まったと回答した学生が書いた自由記述欄には「患者の笑顔」という言葉が多くみられた。臨床実習への参加中に患者と会話をする機会を得た学生が多かったと思われる。患者の笑顔を見ることで、柔道整復師の仕事が患者の役に立っているという実感を得、それが医療従事者としての充実感に繋がったと考えられた。

３つ目の理由は柔道整復師の仕事のイメージが明確になったことである。短大の講義では柔道整復の理論と技術を学ぶが、それらは実際の臨床の場では仕事の一部に過ぎない。医療機器の着脱一つにしても患者への声かけ、具体的な装着部位、症状による医療機器の使い分けなどが求められる。また患者への挨拶や誘導、患者との会話の仕方などは学校で正式に習わないものの、日常の接骨院業務には欠かせない重要なスキルである。それらを実際に目にすることで、柔道整復師の仕事のイメージが明確になったことが、資格取得への意志の上昇につながったと考えられた。

つまり臨床実習を体験することで柔道整復師の資格取得への意志が高まった理由としては、指導教員への憧れや患者と接して感じた充実感、仕事イメージの明確化があると考えられた。このことにより、学生にとって勉強する目的が「資格を取ること」から「柔道整復師として働くこと」に変わったのではなかろうか。

逆に臨床実習を体験することで資格取得への意志が低下した学生もみられた。その理由としては仕事の内容が明確になったことで逆に自分にできるのかという不安が高まったこと、また本当にやりたい仕事なのかが分からなくなったことが挙げられた。臨床実習を体験することでそのような不安を抱いた学生に対してどのような対策を講じるかは、今後の重要な課題になる

であろう。

２　臨床実習前後における勉強への取り組み意欲

臨床実習を体験することで勉強への取り組み意欲が増したと回答した学生の自由記述の内容は、次の２つに分類されると考えられた。

１つ目は仕事内容への興味が増したことである。臨床実習で先生方の治療を目にすることで講義だけでは分からなかった仕事の魅力に気づき、仕事への興味が増したと考えられる。講義で学んだ知識が臨床の場でどのように活かされるかに気づいたことで、勉強への取り組み意欲が増したと考えられた。

２つ目は自身の知識不足を実感したことである。先生が患者の症状を見極め、患者に説明する様子を見たことで、将来求められる知識量と現在の知識量の差を実感した学生が多かったと考えられた。将来自分が患者の治療に当たることを想像したときに、今のままではいけないと感じたことで、勉強への取り組み意欲が増したと考えられた。

３　臨床実習前後における柔道整復師の仕事に対するイメージの変化

臨床実習の前後で抱いていた柔道整復師の仕事に対するイメージに変化がなかったと回答した学生の数は、昼間部は 28 名であった。しかし昼間部の学生の 43％は接骨院に通院したことがなく、52％は接骨院等でアルバイトした経験がないと答えている。接骨院への通院経験がなく、接骨院等でのアルバイト経験のない学生が柔道整復師の仕事に対するイメージをどこから得ているのかは不明であるが、事前に柔道整復師の仕事をイメージ・把握しようとしている学生が多いものと思われた。

臨床実習の前後で抱いていた柔道整復師の仕事に対するイメージに変化がなかったと回答した学生の数は、夜間部では 33 名であった。夜間部の学生の 73％は接骨院等でのアルバイト経験があり、また鍼灸などの他の医療資格を持っている学生の割合も 42％である。このことから考えると、柔道整復師の仕事に対するイメージをすでに明確に持っている学生が多いものと考えられた。

臨床実習の前後で抱いていた柔道整復師の仕事に対するイメージに変化があったと回答した学生の数は、昼間部は 16 名であった。臨床実習を経験することで学生は柔道整復師の仕事内容を明確にイメージしやすくなったと考えられた。

また、臨床実習の前後で抱いていた柔道整復師の仕事に対するイメージに変化があったと回答した学生の数は、夜間部では７名であった。うち５名が柔道整復師の仕事内容を事前に思っていたよりもコミュニケーションを大切にする仕事だと答えている。このことから、臨床実習には講義だけでは伝えきれない柔道整復師の仕事の一端を学生に伝える役目があったと推測された。

４　臨床実習の効果

選択肢に挙げた８つの項目は大きく２つに分けられる。

１つは医療機器の名称や使い方、症状の知識、治療法など座学で学ぶことのできる知識面での効果を表す項目である。昼間部、夜間部共にもっとも効果を実感している学生が多かったのは医療機器の使い方に対してであった。指導教員が実際に患者に装着している場面を間近で観察し、着脱法の指導を個別に受けていたためだと考えられた。また､症状の知識や治療法など､授業で学んだ知識を実際の症例に当てはめて観察する機会を得ることができる点が臨床実習の効果の一つと考えられた。

もう１つはコミュニケーションの取り方や大切さ、接遇マナーや心構えなど講義で学ぶことが難しいと考えられる項目である。コミュニケーションの取り方や大切さ、接遇マナーや仕事に対する心構えについては臨床実習前に講義を行っているが、接骨院等で研修したことのない学生にとっては実感しにくい項目であると考えられる。しかし日常の接骨院業務の中では治療と並んで重要な項目といえる。そのような、講義では伝えにくいが、実際には重要な項目を学生に伝え得たことは、臨床実習の大きな効果であると考えられた。

つまり、講義で学んだ知識を臨床例と結びつけ、講義では実感しにくいコミュニケーションの大切さや接遇マナー、心構えなどについては、そこを補う効果が臨床実習にはあると推測された。

５　臨床実習に対する要望

「見学だけでなく仕事もしたい」という要望が最も多かった。学生には患者の誘導や医療機器の準備、片付け、治療補助などの役割があったものの、実際には治療者が忙しそうに治療をしているのを見学している時間が多くなったものと思われた。１週間足らずの臨

床実習では、自ら仕事を見つけて積極的に動けるほど院内のことを把握することもできず、そのもどかしさがこのような要望になったのではないだろうか。

「治療の方法をもっと見たい」という要望はベッドの中で行われている治療法をもっと見学したい、という要望であると考えられた。ベッド内では患者は上着を脱いでいることが多く、この要望に応えるのは難しいと考えられるため、学生に対しては症例検討の形で症状や治療方針を診療時間終了後に伝えていたが、その際に具体的な治療法も教える等の方法も学生の要望に応える方法として考えられた。

「実習期間や回数および人数の改善」は実習期間を決める決定権が学生にないことへの不満と考えられた。また院内のスペースとの兼ね合いで、一度に臨床実習に参加する人数を３人までとしていたが、状況によっては３人でも多いと感じられる場合があったようであった。

Ⅶ　今後の課題

はじめに本研究の限界について述べる。本研究は平成 24 年度５月に行ったアンケート調査によるが、対象となった学生が臨床実習を行ったのは平成 23 年度であった。そのため、臨床実習が終わってから半年から１年の期間が空いていることを考慮しなくてはならない。臨床実習がもつ効果をより正確に測定するためには、今後は臨床実習の前後で随時調査していくことが必要であろう。

次に資格取得への意志と勉強への取り組み意欲の強さについての評価方法の課題を述べる。今回は臨床実習の前後における資格取得への意志や勉強への取り組み意欲の強さを 10 段階で評価させた。臨床実習の前後で資格取得への意志や勉強への取り組み意欲が高まると予想し、実際に統計学的に有意な差があったが、その差はともに１点未満であり、実質的に意味のある差とは言えなかった。現在の臨床実習の実施方法に原因があったのか、今回の調査の実施時期に問題があったのかは今回の調査からは確認できなかった。また、10 段階評価法でいくつ数値が上昇すれば実質的な上昇とみなすことができるのか、明確な基準はない。さらに臨床実習後の自己評価で実質的な上昇があったとしても、その後の学生の生活態度や勉強への取り組み態度などに実際の変化が見られなければ、本当の効果があったとは言えないであろう。

今後臨床実習が学生に及ぼした効果が真に効果のあるものであったかどうかを明らかにするためには、臨床実習のみを研究対象とするのではなく、その後の学生の講義への取り組みなどを考慮することも、今後の研究においては重要な視点となると考えられた。

（本研究の一部は第 13 回日本健康行動科学会学術大会にてポスター発表したものである。）

謝辞

本研究に協力していただいた 2013 年度の臨床実習に参加した、帝京短期大学柔道整復コースの学生と実習指導者の皆さんに深く御礼申し上げます。本学非常勤講師の栗田明子先生にはアンケート作成においてさまざまなアドバイスを頂きました。心より御礼申し上げます。

【参考文献】

安食正夫　山口善久　（1978）.『老齢化社会への対応』ドメス出版

岡本祐三　（1996）.『高齢者医療と福祉』 岩波書店

堀洋道　吉田富二雄　（2001）.『心理学測定尺度集Ⅱ』サイエンス社